

を行えばさらに良好な結果が期待できると考える。

20. 当センターにおける開胸例について

小林延年, 半沢 僑
(県西部浜松医療センター・胸部外科)

1978年の一年間に、当科で扱った開胸症例は64例、内訳は肺切除25例、肺部分切除・縫縮が19例、食道亜全摘胸壁前食道胃吻合5例等である。このうち肺癌の切除例は12例(切除率27.1%)、他に肺 monosporium 症、Swyer-James Syndrom, Lymphocytic Interstitial Pneumonia, Pseudolymphoma, Chondroma, 縦隔の Neuroblastoma 等がみられたが、この内3例について供覧した。

21. Closing Volume Curve 3相における波動について

長谷川正博, 長尾啓一, 渡辺昌平
(千大・肺研内科)
嶋田晃一郎(独協医科大学胸部外科)

呼吸低流量曲線に現れる心拍に一致する動揺は、Cardiogenic Oscillation の成因に関係すると考えられるが、これが心自体の変形によるものか、あるいは、われわれが考えるように肺内起原であるのかを確かめようとした。実験は成犬を用い、閉胸、開胸にて呼吸低流量曲線を心電曲線と同時記録した。つぎに、摘出肺で拍動性体外循環ポンプを用いて行った。いずれの場合にも、拍動に同調する動揺が呼吸低流量曲線にみられた。

22. Sarcoidosis における Angiotensin Converting Enzyme (ACE) 活性についての研究

○有賀 光, 佐藤重明, 白井厚治
森崎信尋, 篠宮正樹, 永瀬佳子
仲野敏彦, 河内文雄
(川鉄病院内科)

サルコイドーシスその他各種疾患について、血清中のACE活性の測定をこころみた。方法はCushman等の方法をLiebermannが改良したもので、Hippuryl-Histidyl-Leucineを基質とし、pH 8.3のリン酸Bufferを用いた。

その結果、サルコイドーシスを始め、肝炎、甲状腺機能亢進症等においてもACE値が上昇することをみとめた。サルコイドーシスについては胸部X線像にて、両側肺門リンパ腺の著明に腫脹しているが肺野に病変のなかった症例、また肺野病変をもみとめた症例の2症例のX線

像の経過とACE活性の変動を例示した。いずれも活動期高値を示していたACEがX線像の改善にともなって、低下していくことが確認された。

また急性肝炎の症例についても病状に並行して、ACE活性値の低下していくことを知り得た。

サルコイドーシスにおけるACE値の上昇の機序及び診断的意義について、今後検討をすすめたい。

23. 三尖弁閉鎖症のフォンタン変法による2治験例

中村常太郎, 相楽恒俊, 松本博雄
瀬崎登志彰, 勝田貞夫, 小林晴夫
遠藤 毅, 加部恒雄, 斎藤 学
高原 善治, 鈴木亮二, 由佐俊和
(県立鶴舞・外科)

Fontan に初まる三尖弁閉鎖症(TA)の機能的根治手術は、Kreuzerによりその術式が簡略化され、さらにその後、1b型に対しては、弁なし人工血管に依る右房右室(流出路)吻合術が、優れた術式として考えられるに至っている。しかし一方、Bowman等は、1b型に対して低形成の右室をロート部狭窄から下方まで切開をのばし、右室腔の拡大をはかった上、右房右室間に生体弁付き人工血管を吻合する方法を発表。右室は経時的に、そのポンプ作用を具現するとし、4, Valve 4, Chamberとするこの方法は、TA手術に対する生理的アプローチであると主張している。我々も最近、6歳女児のTA 1b型に対し、弁無し人工血管による右房右室吻合術を、又13歳女児に対しては、Bowman等の術式に準じたハンコック弁付き人工血管によるConduit手術を行ない、いずれも良好な結果を得たので報告した。

24. 難治性膿胸の内科的治療例(第2報)

諸橋芳夫, 中村和之(旭中央)
金井英夫, 伊藤国明(千大第二内科)
寺田洋臣(旭中央)(千大第一内科)

第9回の本例会に肺結核に合併した41歳の男子の膿胸及び気管支肺炎に合併した58歳の男子の膿胸を内科的に治癒せしめた例を報告したが、今回は70歳の男子で40年前肺結核に施行された人工気胸療法に関係あると思われる膿胸に反覆穿刺及び排膿、洗浄、抗生物質プレドニン、キモブシン注入。更にはドレーン挿入、洗浄、排液、バッグ装置により3年余を要して内科的に治癒せしめた症例を報告する。